

未来を“つくる”美術館フォーラム

鳥取県立美術館がめざす、 コレクション・ラーニング・地域連携のこれから

——美術館運営事業の側面から、美術館のあり方を考えるスペシャルトークセッション



大御堂廃寺後を臨む鳥取県立美術館外観のイメージ（画像提供：横総合計画事務所／イメージ制作：ヴィック Vice Ltd.）

2022.3.27 sun.
14:00 – 17:00

ハイブリッド開催：「ウェビナー」or「会場での聴講」
会場：倉吉未来中心（開場は13:30）／参加費無料

ウェビナーによる参加をご希望の方

下記のQRコードをスキャンし、お申込みください。
先着順、定員500名

ZOOMウェビナー
申込みフォームはこちら →



会場での聴講をご希望の方

会場：倉吉未来中心セミナールーム3
（鳥取県倉吉市駄経寺町212-5）
当日先着80名までご入場いただけます。
受付にて問診票の記入をお願いしています。
マスク着用の上、ご来場ください。

「スペシャルトーク ゲスト」
蔵屋美香（横浜美術館館長）
保坂健二朗（滋賀県立美術館ディレクター）
中島諒人（演出家、鳥取県教育委員）
鈴木潤子（@Jディレクター）
尾崎信一郎（鳥取県立博物館館長）
「司会・聞き手」

開館まであと3年

鳥取県立美術館の外観イメージ画像提供：槇総合計画事務所/イメージ制作：ヴィイク V.I.C.K.E.L



鳥取県では2025年春の開館をめざして、新しい県立美術館の整備を進めています。今年2月の起工式を経て、槇総合計画事務所・竹中工務店設計共同企業体の設計による、広々とした大御堂廃寺跡を臨む明るく開放的な美術館の建設は現在も着々と進行しています。

「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という故事がありますが、その逆もまた真です。新しい施設の完成に向けて、県では新しい美術館にふさわしいさまざまな活動を構想しています。県立博物館の所蔵作品を受け継ぐコレクションはさらに幅を広げ、ここでしか見ることができない名品を加えます。美術を通して児童・学生から大人まで新しい学びを得ることを目的としたラーニング機能も新しい美術館の大きな柱となります。さらに立地する地域と連携し、地域の核となる施設になることも美術館の使命の一つです。

開館を3年後に控え、カウントダウンイベントの一つとして、日本各地でユニークな活動をしている美術館の館長、地域とつながりながら芸術活動に取り組んでいる関係者をお招きしてトークセッションを開催いたします。建設の進行とは違って、まだ目に見えるかたちをとらない新しい美術館の活動や運営、そしてその方向性を知っていただくための絶好の機会に、多くの皆さまのご来場とご視聴をお待ちしております。

「美術館の使い方」とは？

「コレクション」「ラーニング」「地域連携」を主要テーマに、各地でのユニークな取り組みを話題提供していただきます。

ゲストによるトークの後に、トークセッションや質疑応答を行います。



蔵屋 美香(くらや・みか)

千葉県生まれ。東京国立近代美術館を経て2020年より現職。これまで手がけた主な企画展に「ビデオを待ちながら：映像、60年代から今日へ」(東京国立近代美術館、2009)、「ぬぐ絵画：日本のヌード 1880-1945」(東京国立近代美術館、2011-2012)、「高松次郎 ミステリーズ」(東京国立近代美術館、2014)、「没後40年 熊谷守一 生きるよろこび」(東京国立近代美術館他、2017)、「窓展：窓をめぐるアートと建築の旅」(東京国立近代美術館他、2019-2020)など。また、2013年には第55回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展で日本館キュレーターを務め、特別表彰を受賞(アーティスト：田中功起)。



保坂 健二郎(ほさか・けんじろう)

1976年生まれ。慶應義塾大学大学院修士課程修了後、2000年より20年まで東京国立近代美術館に学芸員として勤務。2021年より滋賀県立美術館のディレクターに着任。これまで企画した主な展覧会に「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」(ハウス・コンストラクティヴ他、2014-15)、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」(東京国立近代美術館、2016)、「日本の家 1945年以降の建築とくらし」(MAXXI国立21世紀美術館および東京国立近代美術館、2016-17)、「人間の才能 生み出すことと生きること」(滋賀県立美術館、2022)など。



中島 諒人(なかしま・まこと)

1966年生まれ。東京大学法学部卒業。大学在学中より演劇活動を開始、卒業後東京を拠点に劇団を主宰。2004年から1年半、静岡県舞台芸術センターに所属。2006年より鳥取で廃校を劇場に変え、「鳥の劇場」をスタート。二千年以上の歴史を持つ文化装置＝演劇の本来の力を社会に示し、演劇/劇場の深い価値が広く認識されることを目指す。芸術的価値の追究と普及活動を両輪に、地域振興や教育分野にも関わる。代表作「老貴婦人の訪問」(デュレンマット)、「剣を鍛える話」(魯迅)など。2003年、利賀演出家コンクール最優秀演出家賞。2010年、芸術選奨文部科学大臣新人賞。BeSeTo演劇祭日本委員会代表。



鈴木 潤子(すずき・じゅんこ)

時事通信社、日本科学未来館広報室長・国際渉外室長、森美術館準備室を経てPRマネージャーとして広報・宣伝およびマーケティング、ブランディングなどコミュニケーション全般を統括。2011年個人事務所@設立。ATELIER MUJI、ATELIER MUJI GINZAにてシニアキュレーターとして10年間で50件以上の展覧会と関連イベントを企画運営。また、TokyoTokyo フェスティバルスペシャル13 広報ディレクションやアートプロジェクト「なのおえつ うみまちアート」キュレーションなど地域もフィールドに活躍。民間・行政を問わずアートやデザインを中心に、幅広い分野でキュレーションやPR、文化施設の立ち上げや運営に携わる。

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、予定を変更する場合があります。最新の情報は、鳥取県立美術館ウェブサイトまたは、SNS等をご覧ください。